

生長の家 神の国 寮だより

光の泉

the spring of light



第 21 号

令和元年度 秋号

公益財団法人 生長の家社会事業団
児童養護施設 生長の家神の国寮
〒186-0003
東京都国立市富士見台2-39-1
tel 042-572-8770
fax 042-573-9205
<http://www.kamino92.or.jp/>



9月1日 「卒寮生とふれあう会」

赤坂時代の「卒寮生」をお迎えして

ところで、この夏に開催された「納涼いちよう祭」に、5名の「卒寮生」を特別ゲストとして招待させて頂きました。生長の家神の国寮発祥の地・赤坂時代の寮生です。昭和15年生まれの79歳の方をはじめ皆さん戦災で親兄弟と別れ別れになられた方々です。

今の寮生が生活する各ホームにご案内すると、まず個室を持つて

いることにビックリ！「僕らは5、6名がこのくらいの部屋に一緒に生活してたよ」と言われながら、「僕らは親が亡くなったから辛かったけど、とにかく生きてきた。今のこの子達は親がいるのに施設にいなくちやいけないから、心に傷がある子が多いんだと思う。だから手厚く育ててあげてください」と話されました。

後日頂いたお便りには、「祭を支えるスタッフの多さ、若さ、機敏な動き、寮生のくつたくなき笑顔、生活空間のゆとり、ただただ隔世の感を受けました。当日頂いた四種の薬味付き本格竹製流しそいうめんには格別の涼を頂きました。描いていた児童養護施設のイメージが一新しました。」と記されていました。

こうして70の齢を過ぎた卒寮生の皆さんが、今も「母」として慕う方が、長らく「寮母」として住み込みでお世話をされてきた片岡直子先生です。90歳を超え今なお、当時の神の国寮の子どもたちのかけがいのないお母さんとして相談にの

られたり「童心会」という赤坂時代の卒寮生の集まりに元気で出席されています。

創設者の「報い求めね愛」の実践

片岡先生が入職された昭和23年頃は、食料は配給制でお米やじゃがいもや豆なども調達に苦労されたそうです。また、戦災で親兄弟と別れ別れになった子どもたちは苗字も年も覚えていないで、名前だけ分かっていただけの子たちは推定年齢と苗字をつけて育てられたとのこと。それでも、今と同じようにクリスマス会は大いに盛り上がり、キャンプ等の行事は子どもたちの一番の楽しみだったそうです。また、当時は中学卒業時に卒寮して就職することが当たり前だった時代。それでも、当時の卒寮生の中には、働きながら高校に通い、大学に進学する方もあったといえます。

赤坂時代の卒寮生の皆さんの笑顔を押しながら、時代は移り変わり、入所理由も親子関係も社会情勢とともに大きく変遷していく中、児童養護の原点ともいえるべき「変わらない心」を忘れてはならないとしみじみ感じさせてもらいました。それは、一面焼け野原の東京の真ん中で私財を抛って戦災孤児を愛育された創設者谷口雅春先生の「報い求めね愛」の実践に他なりません。

私たちも、いかなる境遇、運命に翻弄された子どもが入所して来ようとも、インケア・アフターケアを通じてその子を全身で受け止め、寄りそい、愛する「無償の愛」の実践を続けてまいる所存です。

光の泉

「卒寮生今昔物語」 〜変わらぬ養育のこころ！

施設長 國弘昭義

新学期を迎えた9月1日、「卒寮生とふれあう会」が開催されました。3名の卒寮生の語る言葉に、参加した中学生・高校生は真剣な面持ちで聞き入っていました。また、卒寮生の生長した姿を見つめる職員の間には涙が光っていました。

卒寮生の生長した姿に感動！

一昨年卒寮して体育系の専門学校に通うA君は、2歳から16年間の神の国寮での生活を振り返りながら、陸上選手として全国大会出場が決まり、系列の大学に編入する希望を熱く語りました。

自衛官として、日々の厳しい訓練を通して日本の平和を衛り、災害時の救援活動等の任務を担うB君。遅しく日焼けした顔に穏やかな微笑をたたえながら、